

## 心に響く音楽体験

——物心ついた時に側にあったのは、  
バロック音楽でした。

ASEAN 歯科医療ネットワーク 代表理事  
和久本 雅彦 院長  
和久本 雅彦



東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第14回は、歯科医師として医院経営しつつ、ASEAN地域の歯科医療に携わる和久本雅彦様です。パートナー会員として東京フィルをご支援くださっています。物心ついたときに触れたバロック音楽の思い出を綴ってくださいました。

物心ついた時、父の仕事の関係で、デンマークのコペンハーゲンに住んでいました。父は旅行が好きで、休みのたびに家族で列車の旅をしました。特にウィーンは、足繁く訪れた街の一つでした。当時から好奇心旺盛だった自分は、ベートーヴェンハウスや、シューベルトの生家に展示されていたピアノを触って怒られたりしました。

母は音大の声楽科を卒業し、日本に帰国後は演奏活動をしながら最近まで弟子を取って教えていました。自分が物心ついた時に住んでいた家も、1階がレッスン室や歯科の診療所、2階が自宅という作りでしたので、毎晩布団に入ると枕越しに母が自分で練習する歌が聞こえていたのを覚えています。

そんな家庭でしたので、家にいる時にはほとんど一人で遊んでいました。そんな自分に母が買い与えてくれたのが、簡単なレコードプレイヤーと、もう散逸してしまいましたが、当時どこの出版社から発売されていた「偉大なクラシック音楽家の生涯」というようなタイトルのシリーズのレコードでした。このレコードは、1965年くら

2022年11月、教え子のクリニックでベトナムホーチミン市の保育園児の検診を行いました。大きな体は子供達に大人気で、終わった後もなかなか離れてくれませんでした



いから発売されたようで、7～8年は続いたでしょうか。ドラマ仕立てて作曲家の生涯をその代表曲を挿入して辿るもので、第1巻が「ヘンデル」次が「バッハ」で、全部で20巻くらいあったと思います。

中でも、自分が好んで聞いていたのは、バッハとヘンデルでした。還暦を過ぎた今でも、断片的ですがこの2枚のレコードの曲や台詞は、時折思い出すほどです。内容が一番残っているのは、ヘンデルです。ドラマの最初のクライマックスである『水上の音楽』が流れるくぐりには毎回ドキドキして、ワクワクが止まりませんでした。自分にとってのクラシックはバロック音楽であったと言えます。

自分は「門前の小僧」でピアノを嗜みますが、生まれて初めて弾いたのは、バッハの「メヌエット」でした。和音ではなく、単純な音の繋がりがとても好きでした。ベトナム、ホーチミン市の自分のオフィスの受付には古いアップライトピアノがあり、時々スタッフに内緒で触っています。

32歳の時にご縁をいただいて英国で勤務するようになってからは、ヘンデルの足跡を辿って、墓所のウェストミンスター寺院を始め、ハイマーケット劇場などへ足を運びました。

数年前より、ご縁をいただいて東京フィルハーモニー交響楽団の支援者をさせていただいていますが、東京電機大学時代、音響効果の確認のため、音場計測をさせていただいたサントリーホールに足繁く通える喜びを満喫させていただいています。コロナ前の改修で反射板が新しくなり、金管楽器の響きが一層良くなったように思います。

和久本雅彦(わくもと・まさひこ)

歯科医師の父と、声楽家の母との間に生まれる。歯科医師免許取得後、工学部で音響工学を学ぶ。英国、ドイツ、アメリカ等で勤務後、2007年和久本歯科医院の4代目院長に就任。専門は音響音声学のため、通院される声楽家、楽団員の方も多し。2012年にASEAN歯科医療ネットワークを設立。発展途上国の歯科教育に献身している。